



中津川市の多様な地域資源

①観光スポット

- ・中山道の街なみ【中津川宿、落合宿、馬籠宿】
- ・温泉【中津川温泉クアリゾート湯舟沢、渡合温泉、付知峡倉屋温泉おんぼいの湯、湯の島ラジウム鉱泉】
- ・キャンプ場【乙女溪谷、付知峡、夕森、椈の湖、福岡ローマン溪谷】
- ・道の駅【賤母、きりら坂下、五木のやかた・かわうえ、加子母、花街道付知】
- ・レジャースポット【根の上高原、星ヶ見公園、中津川観光栗園、中の島公園ふれあいの里、中津川市ふれあい牧場、椈の湖、夕森公園、恵那峡ワンダーランド、博石館】など

②自然・景観

- ・山岳【恵那山、小秀山、奥三界岳、富士見台、雨乞棚山、二ツ森山、笠置山、高峰山】
- ・清流【木曾川、付知川、阿木川、中津川、川上川、落合川、和田川、湯舟沢川、四ツ目川】
- ・県立自然公園【恵那峡、胞山、裏木曾】
- ・溪谷【付知峡、乙女溪谷、不動溪谷、ローマン溪谷】
- ・国指定天然記念物【坂本のハナノキ自生地、加子母のスギ、垂洞のシダレモミ(付知)、ヒツバタゴ自生地(蛭川)】
- ・県指定天然記念物【恵那神社の夫婦スギ、瀬戸のカヤ、自生のヒツバタゴ(苗木)、大実カヤの木(苗木)、岩屋堂のシデコブシ群生地、新茶屋の自生ヒツバタゴ、長楽寺のイチョウ、磯前神社のスギ(坂下)、坂下のモミラン、坂下のハナノキ群生地、紅岩、ハナノキ自生地(蛭川)、しだれガキ(蛭川)、上山口の諏訪神社社叢】
- ・自然【バイカモ、苗木の水晶等鉱物、神坂大檜、賤母のもみじ、椈の湖自然公園のソバの花、夕森公園のもみじ、裏木曾国有林、和田川奇岩甌穴(おうけつ)群】
- ・景観【恵那山の眺望、笠置山・御嶽山の眺望、落合地区の棚田、女夫岩、乙姫岩】など

③地場産品

- ・栗きんとんなどの和菓子、米、茶、栗、夏秋トマト、夏秋なす、瀬戸の筍、シクラメン、ソバ、西方いも、あじめコショウ、やままゆ、マツタケ、飛騨牛、きねふりもち(もち米)、東濃桜、木曾ヒノキ、産直住宅、木材加工品、石製品、工業製品 など

④食

- ・五平餅、朴葉寿司、そば、中津川とりトマ井、からすみ、付知川の鮎、しょうゆかつ井、ケイチャン、芋もち、菊牛蒡漬け、地酒 など

⑤歴史・文化

- ・国・県指定史跡【苗木城跡、中山道(新茶屋の一里塚、落合宿本陣、落合宿の常夜灯含む)、中洗井北第一号窯跡、野尻遺跡、島崎藤村宅(馬籠宿本陣)跡】
- ・国指定有形文化財【木造薬師如来坐像、太刀銘備前国長船住近景、太刀銘吉則】
- ・県指定有形文化財【太刀銘貞綱、木造馬頭観世音菩薩像、木造役行者坐像、木造釈迦如来坐像、木造薬師如来坐像】
- ・県指定有形民俗文化財【恵那文楽人形頭、加子母の農村舞台(明治座)】
- ・県指定無形民俗文化財【恵那文楽、木遣音頭、翁舞附人形頭と面、蛭川の杵振踊、坂下の花馬】
- ・神社【津島神社、恵那神社、八幡神社、神明神社、風神神社、血洗神社、坂下神社、出雲福德神社、白山神社、下野庚申堂、安弘見神社】
- ・歴史文化【地歌舞伎、常盤座、蛭子座、馬籠宿今井家・大脇家・原家、東山道神坂峠、木曾越古道三十三観音、苗木神明神社の流鏑馬、木曾ヒノキ備林】
- ・文化施設【東美濃ふれあいセンター、中山道歴史資料館、鉱物博物館、苗木遠山史料館、青邨記念館、藤村記念館、東山魁夷心の旅路館、熊谷守一記念館、子ども科学館、馬籠文化交流施設、中津川市立図書館、蛭川済美図書館】
- ・島崎藤村など本市ゆかりの文化人、各地域の祭り、イベント など



苗木城跡

(2) 交通の要衝として発展してきた中津川市

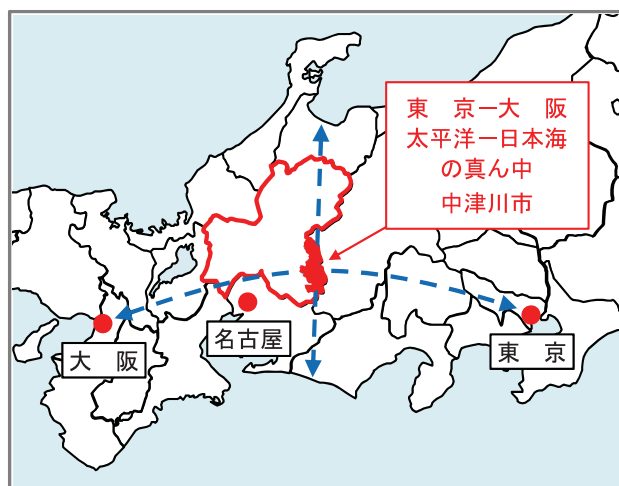
本市は、日本のほぼ中央、二大都市、東京・大阪の真ん中に位置し、さらに、三河地方(太平洋側)と北陸地方(日本海側)の間でもあり、文字どおり日本のまん真ん中のまちです。

また、奈良・平安時代には都と東国を結ぶ東山道がこの地を通り、江戸時代には江戸と京都を結ぶ重要な幹線道路として中山道が整備され、その宿場となった中津川は、中山道や木曾川沿いの地域、飛騨街道や付知川沿いの地域を結ぶ経済の拠点となりました。

さらに、明治に入ると名古屋まで鉄道(JR中央本線)が敷かれ、製糸業や製紙業などの近代工業に牽引される形で大きく発展し、戦後の車社会を迎えたなかでは、国道19号の整備、中央自動車道の開通などによる交通アクセスの向上や中核工業団地の整備などが相まって、工業都市として東濃東部の中核的な役割を担ってきました。

このように、本市は古くから交通の要衝として重要な役割を果たし発展してきたまちであり、未来に向けてはニア、濃飛横断自動車道などさらなる交通網の充実が見込まれています。

日本のほぼ中央に位置する中津川市



(3) 名古屋都市圏の一員としての中津川市

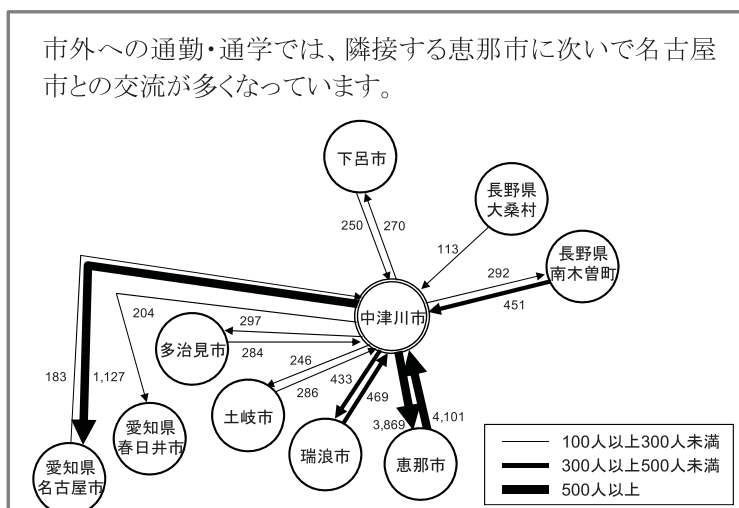
名古屋都市圏は自動車産業をはじめ、世界規模で事業を展開する国内外の大企業が集積し、その関連産業が愛知県内にとどまらず周辺の岐阜県、三重県、静岡県などにも数多く立地し、日本随一のモノづくり産業の集積地です。本市においても、電気機械器具や自動車関連をはじめとする製造業が立地し、名古屋都市圏のモノづくりの一翼を担っています。

名古屋とは、国道19号、中央自動車道、JR中央本線などにより1時間程度で結ばれており、産業面だけでなく、日々の暮らしのなかでも盛んに交流が行われています。平成22年国勢調査によると、本市から名古屋市への通勤・通学者は1,000人を超えており、名古屋市から本市へも200名弱の通勤・通学者があります。休日などには、多くの市民が買い物やレジャーで名古屋方面へ出掛け、逆に名古屋方面からは近場の日帰り観光地として多くの来訪者があります。

さらには、名古屋市の野外教育センターが市内に立地し、名古屋市内の小学生は教育活動の一環として1回は本市を訪れており、名古屋市民にとって親しみある地域として認識されています。

また、本市を流れ、伊勢湾に注ぐ木曾川の上流部には、愛知の水瓶である牧尾ダムがあり、本市の森林保全活動や環境への取り組みは、愛知県民の暮らしを支えており、多くの愛知県民がその活動に参加されるなど交流が行われています。

通勤・通学の状況



出典:国勢調査(H22)



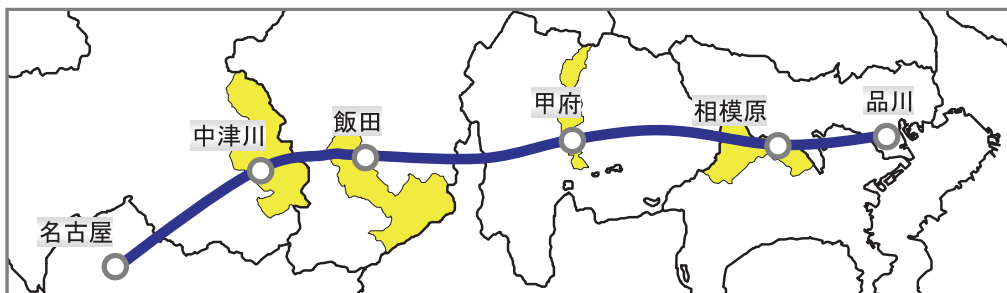
(4) リニア駅設置都市との比較からみた中津川市

東京から名古屋までの間には品川、名古屋の二つのターミナル駅以外に本市も含め四つの駅ができますが、駅ができるまちにはそれぞれに異なる個性があります。

このため、リニアの波及効果を活かすための効果的な戦略や施策を立案していくには、本市の現状を客観的に捉え本市の立ち位置や強み・弱みを整理し、他の駅設置都市との違いを明確にすることが重要であることから、甲府市および飯田市との統計データなどを用いた比較を行いました。なお、都市間だけでは特徴の出にくい観光や農林業などの分野については、周辺地域も含めた都市圏どうしで比較しました。

注) 相模原市は首都圏に位置する人口70万人超の政令指定都市であり都市の規模や構造も異なることから比較対象から外しました。

リニア駅設置候補都市の位置



都市圏の設定(通勤・通学者数5%圏構成市町村)

	中津川都市圏 (2市1町1村)	飯田都市圏 (1市3町9村)	甲府都市圏 (9市3町)
10%圏	南木曾町、恵那市	松川町、高森町、阿南町、阿智村、平谷村、下條村、天龍村、泰阜村、喬木村、豊丘村、大鹿村	山梨市、韮崎市、南アルプス市、甲斐市、笛吹市、甲州市、中央市、市川三郷町、富士川町、昭和町
5%圏	大桑村	根羽村、売木村	北杜市、身延町

① 人口・面積

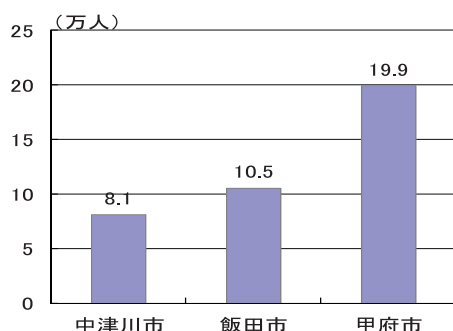
人口は本市が81,000人、飯田市が105,000人、甲府市が199,000人で、3都市のなかで本市が最も人口が少なく、人口減少率も最も大きくなっています。

また、高齢化率(65歳以上人口)では、平成22年国勢調査の結果によると本市は27.8%、飯田市は28.0%と本市と同程度、甲府市は24.6%で最も低くなっています。

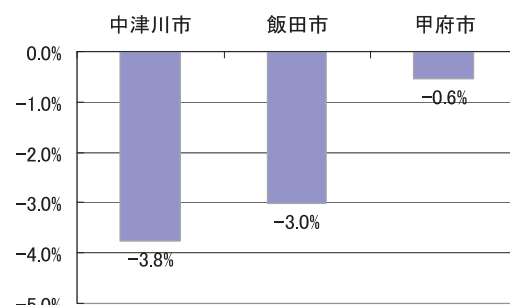
面積は、本市の676km²に対して飯田市が659km²とほぼ同規模、甲府市は212km²と本市の1/3程度です。

また、可住地面積は、本市が145km²と飯田市や甲府市よりも広く、全面積に対するその割合は本市の21.4%に対して、飯田市が17.9%と低く、甲府市は35.6%と高くなっています。

人口(平成22年)

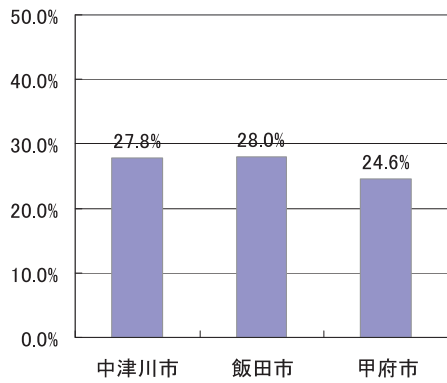


人口変化率(平成17年から平成22年)



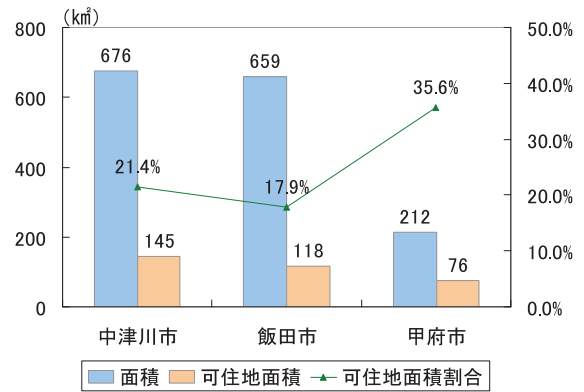


高齢化率(平成22年)



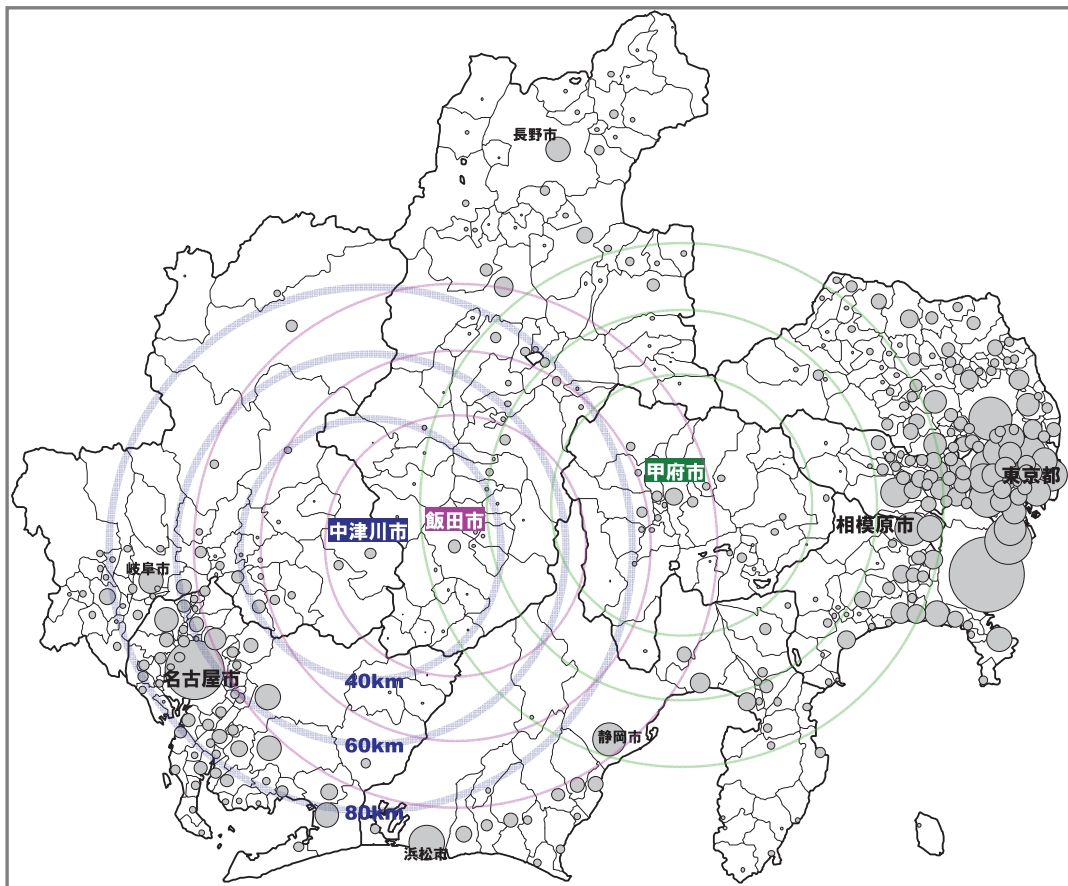
出典: 国勢調査(H22)

面積・可住地面積・可住地面積割合



出典: 全国都道府市区町村別面積調(H22)

人口分布

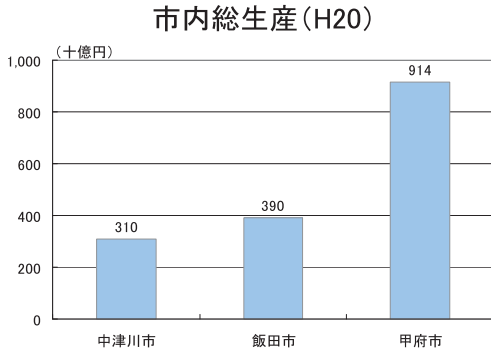




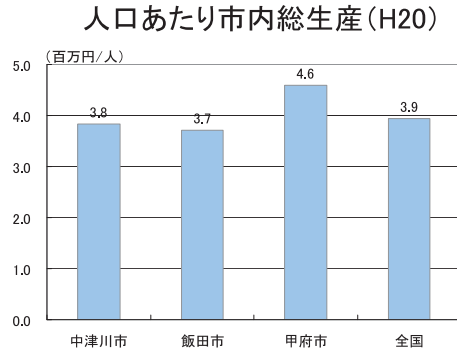
② 産業(全般)

市内総生産をみると、平成20年の本市は3,100億円と飯田市の3,900億円とほぼ同規模であり、甲府市の数値は平成17年ですが、9,140億円と本市の3倍程度の経済規模です。

人口あたりでみると、本市は飯田市を上回り、全国と同水準となっています。



出典:各市市民経済計算(H20)、各市統計書(H22)
注)甲府市は平成17年度の値、中津川市、飯田市は平成20年度の値。



出典:各市市民経済計算(H20)、国勢調査(H22)
注)人口は平成22年時点

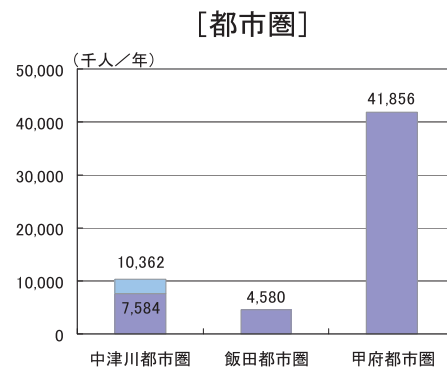
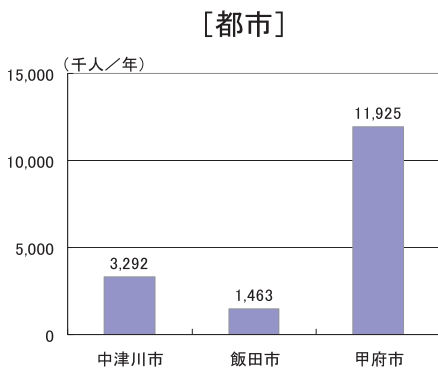
③ 観光

平成22年の本市の観光客数は3,292千人/年で飯田市の2倍、甲府市の1/3程度となっています。

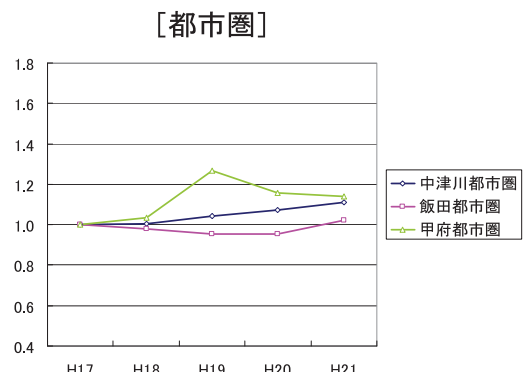
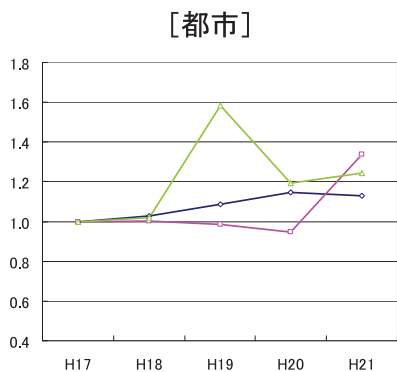
また、都市圏でみると、中津川都市圏では、7,584千人/年で、飯田都市圏と同規模となり、甲府都市圏は41,856千人/年と突出して多くなります。なお、隣接する下呂市を含めると、10,362千人/年となり、飯田都市圏の2倍以上となります。

さらに、観光客数の推移では、本市は増加傾向にあり、飯田市は平成21年、甲府市は平成19年に大きな伸びがみられました。都市圏でも同様の傾向がみられました。

観光客数



観光客数の推移



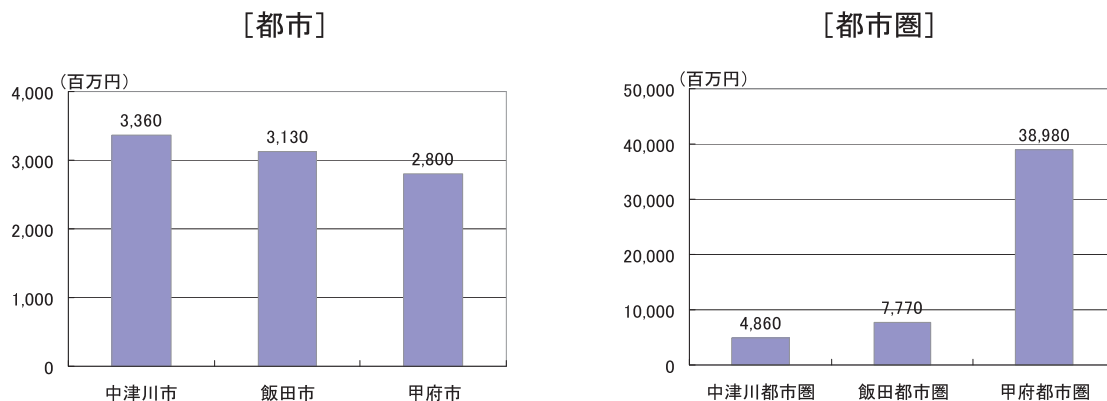
出典:各県観光統計(H22)

④ 農林業

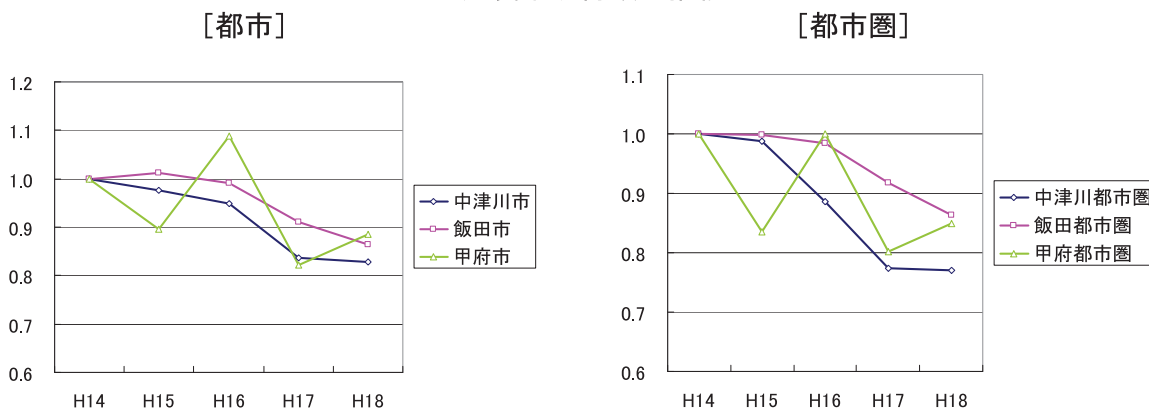
平成18年の生産農業所得額をみると、本市は33.6億円と飯田市や甲府市よりやや多くなっています。しかし、都市圏でみると、周辺に果樹園のある甲府市の生産農業所得額が最も大きくなり、本市の9倍程度となります。さらに、平成18年の生産農業所得額の推移について、平成14年を1.0としてみると、いずれの都市も減少傾向にあり、特に本市は平成17年に大きく減少しており、都市圏でみると、中津川都市圏の減少幅は他の都市よりも大きくなっています。

また、林業において、その経営体数を比較すると、本市は飯田市や甲府市と比較して最も多く、林業が盛んな地域であることがわかります。

生産農業所得額

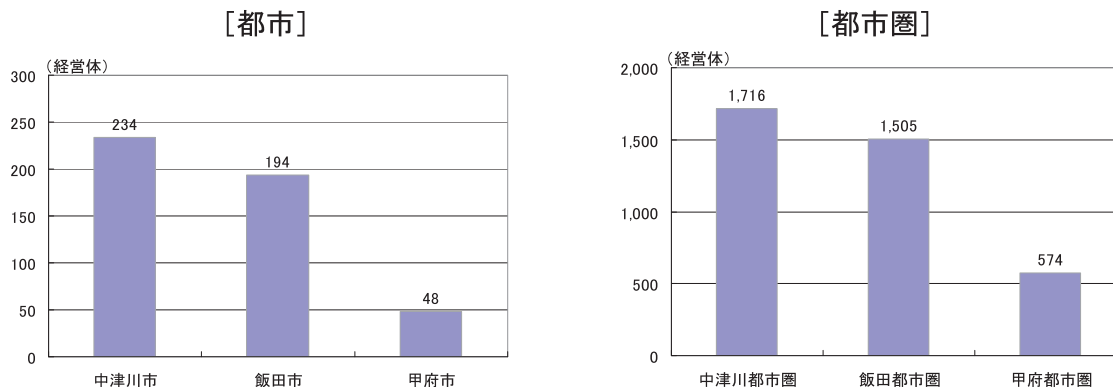


生産農業所得額の推移



出典:生産農業所得統計(H18)

林業経営体数



出典:2005年農林業センサス(H17)

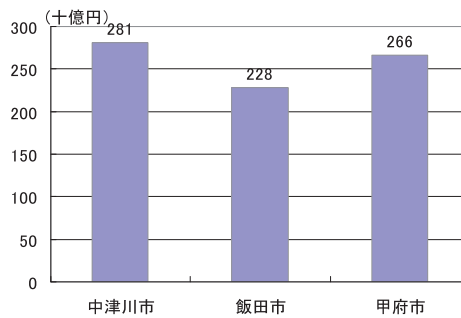


⑤ 工業

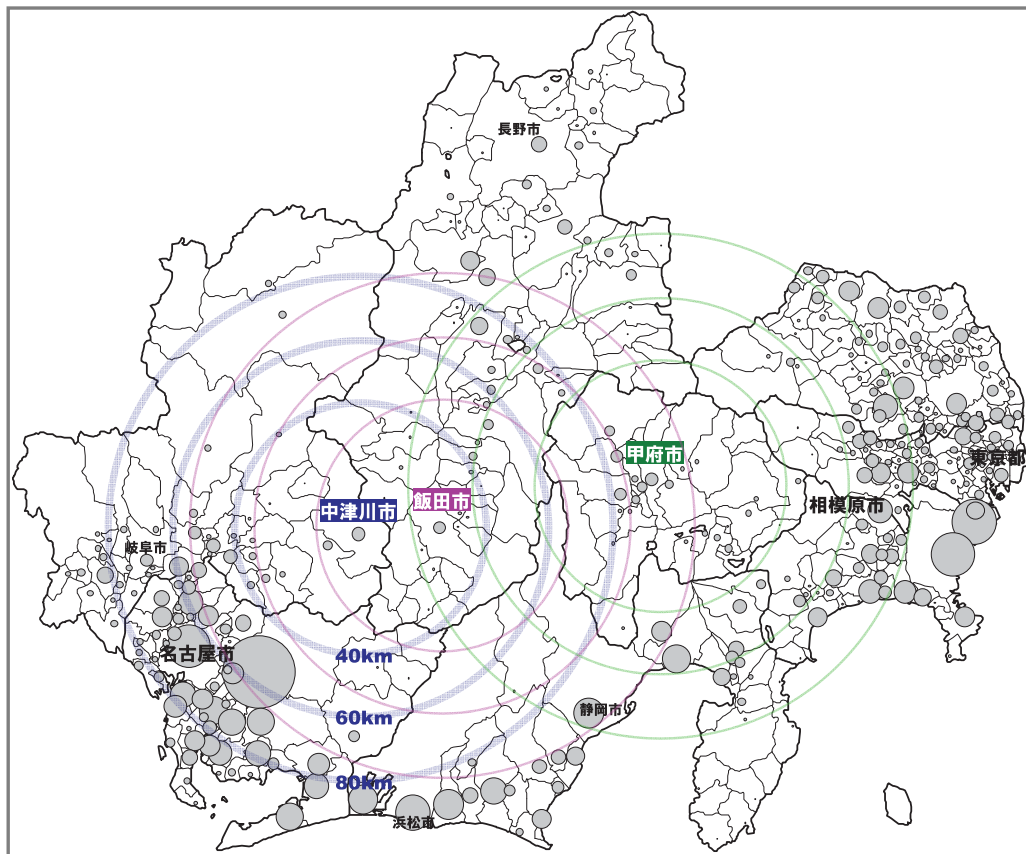
製造品出荷額等を見ると、平成21年では、工業都市を標榜している本市が2,810億円と三都市のなかで最も多くなっています。

中津川中核工業団地(75.6ha)には17社が立地し、工業団地以外にも電気機械や輸送用機械関連業が中心に集積しています。飯田市には天龍峡エコファクトリーパーク(10.3ha)、松尾竜水地区(39.7ha)、桐林環境産業公園(7.4ha)などの工業団地があり、電子・電機を中心とする機械系工業、プラスチック製品などの機械関連業が集積しています。甲府市には甲府南部工業団地(26.3ha)、国母工業団地(97.3ha)、山梨県食品工業団地(14.3ha)などの工業団地があり、半導体製造、電気・電子機器部品、食品製造業などが集積しています。

製造品出荷額等



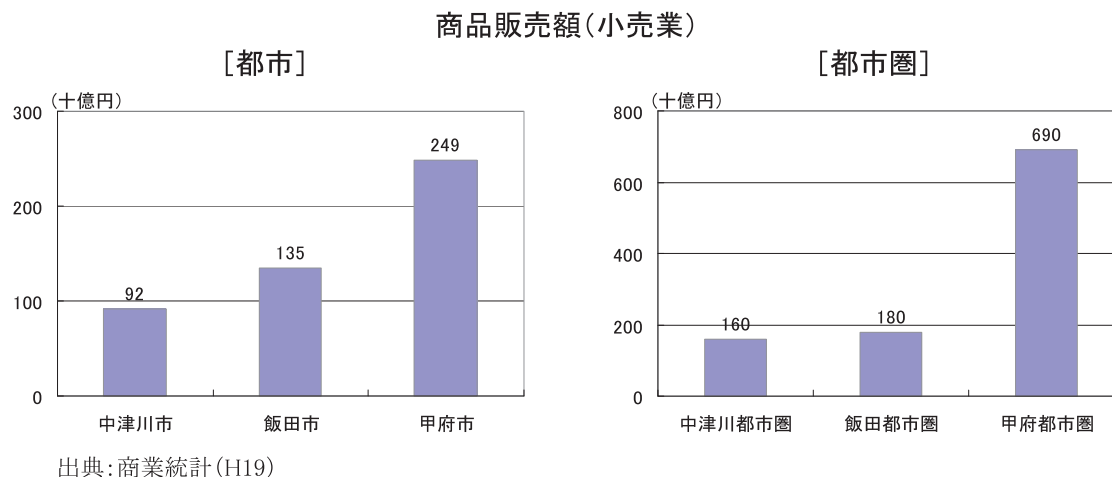
製造品出荷額などの分布



出典:工業統計(H21)

⑥ 商業

平成19年の本市の商品販売額は、920億円と飯田市や甲府市と比べ小さく、甲府市の1/2以下となっています。都市圏でみても同様に、甲府都市圏の商業機能の集積は、本市や飯田市と比較して高くなっています。



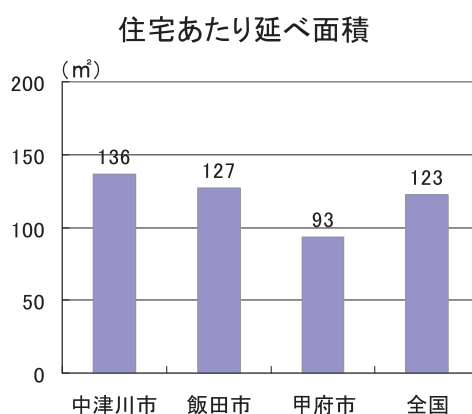
⑦ 暮らし

1住宅あたりの延べ面積を比較すると、平成20年では、本市は136㎡と飯田市の127㎡、甲府市の93㎡よりも広く、全国平均を上回っています。

また、大都市への通勤・通学者の状況をみると、本市は名古屋市へ1,238人(2.6%)となっています。

甲府市は東京都区部へ488人(0.5%)であり、飯田市は東京都区部あるいは名古屋市への通勤・通学者はみられません。

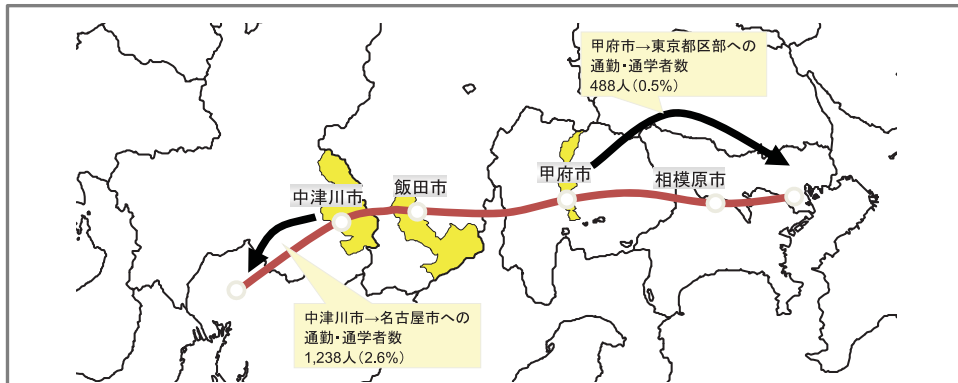
人口あたりの医師数では、平成20年、本市は138人/10万人と、飯田市の221人や甲府市の303人と比べても少なく、全国と比較しても少ない状況です。人口あたりの病院病床数でも本市は、飯田市や甲府市と比べて少なく、全国と比較しても少ない状況です。



出典: 住宅・土地統計調査(H20)

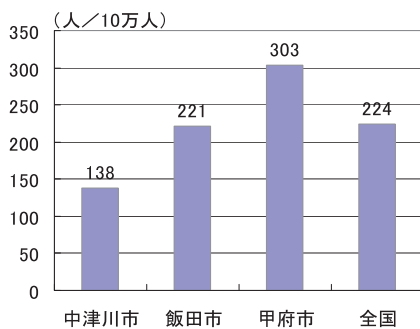


大都市への通勤・通学者数(平成17年)



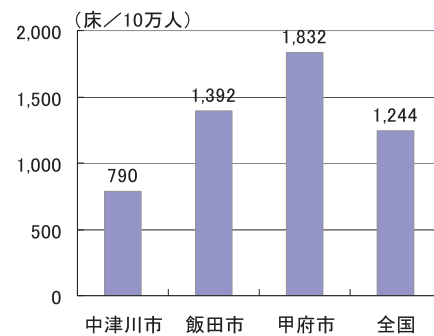
出典:国勢調査(H17) ()内は、全通勤・通学者に対する大都市への通勤・通学者数の割合

10万人あたり医師数(平成20年)



出典:医療・歯科医師・薬剤師調査(H20)

10万人あたり病院病床数(平成22年)



出典:地域保健医療基礎統計(H22)

⑧ 交通

鉄道については、本市にはJR中央本線があり、現在、名古屋ー長野間を結ぶ特急しなのが13往復/日運行されています。飯田市にはJR飯田線があり、飯田ー豊橋間(約130km)を2時間30分で結ぶ特急伊那路が2往復/日運行されています。なお、飯田から辰野方面への特急列車は運行されていません。

また、甲府市にはJR東日本中央本線とJR東海身延線があり、中央本線では、新宿ー松本間の特急あずさが18往復/日、新宿ー甲府間の特急かいじが12往復/日運行されています。さらに、甲府市と静岡方面を結ぶ身延線では甲府ー静岡間の特急ふじかわが7往復/日運行されています。

本市は名古屋市と長野方面へのアクセス、飯田市は豊橋市とのアクセス、甲府市は東京方面、静岡方面へのアクセスが在来線を利用して可能となっています。

各都市の中心駅の乗車人数は、中津川駅が1,256千人/年、飯田駅が387千人/年、甲府駅は5,072千人/年となっています。

また、東京までの所要時間では、本市からは名古屋経由で2時間40分、飯田市からは高速バスで4時間、甲府市からは特急あずさで1時間30分ほどであり、名古屋までは、本市からは特急しなので50分、飯田市からは高速バスで2時間、甲府市からは塩尻駅経由(特急あずさ、特急しなの)で3時間となっています。

一方、道路については、いずれの都市も中央自動車道のインターチェンジがあり、東京方面、名古屋方面にダイレクトに行くことができます。東京・名古屋までの所要時間(最短時間)は、本市が東京都区内まで3時間49分、名古屋市までは58分、飯田市は、東京都区内まで3時間17分、名古屋市まで1時間30分、甲府市は東京都区内まで1時間34分、名古屋市内までは3時間14分であり、飯田市や甲府市が東京・名古屋のいずれにも1時間以上かかるのに対し、本市は名古屋までの所要時間が1時間程度と短いことが特徴となっています。



中心駅乗車人数(平成22年)

駅名	中津川駅	飯田駅	甲府駅
乗車人数	1,256(千人/年)	387(千人/年)	5,072(千人/年)

出典:各市統計書より

東京・名古屋までの所要時間(道路利用:最短時間)

	中津川市(中津川IC)	飯田市(飯田IC)	甲府市(甲府昭和IC)
東京都区内	3時間49分(229分)	3時間17分(197分)	1時間34分(94分)
名古屋市内	58分	1時間30分(90分)	3時間14分(194分)

出典:NEXCO中日本ドライブコンパスより、平日の10時出発で検索

注)東京都区内:首都高速新宿ランプ、名古屋市内:名古屋高速黒川ランプ

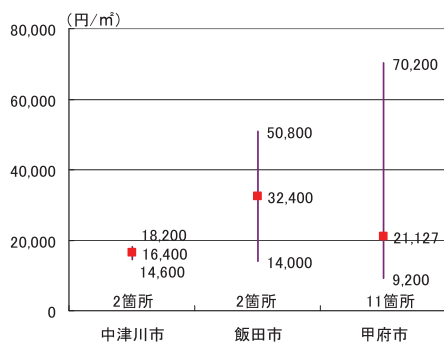
⑨ 地価

平成23年の地価調査によると、工業地価は、本市は最高が18,200円/㎡、最低が14,600円/㎡であり、飯田市は最高50,800円/㎡、甲府市は最高70,200円/㎡と本市と比べ高くなっています。ただし、甲府市には、最低が9,200円/㎡と三都市で最も低い地点があり、価格の差が大きくなっています。平均価格で見れば、本市が最も低い状況です。

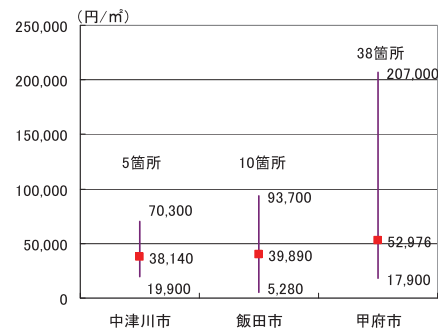
商業地価では、本市は、最高が70,300円/㎡、最低が19,900円/㎡となっており、飯田市の最高が93,700円/㎡、甲府市の最高は207,000円/㎡と本市と比べ高く、平均価格は、本市が最も低い状況です。

住宅地価では、本市の最高が33,100円/㎡、最低が3,500円/㎡、飯田市は最高が47,700円/㎡、甲府市は最高が65,600円/㎡と本市と比べ高くなっています。飯田市は最低が1,910円/㎡と三都市で最も低い地点があり、価格差が大きくなっています。平均価格は、飯田市が最も低いですが、全体的にみれば、本市も同水準となっています。

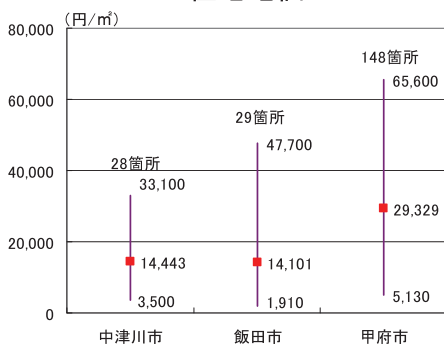
工業地価



商業地価



住宅地価



出典:都道府県地価調査(H23)



2-2 リニア開業時の時代潮流

リニアは、2027(平成39)年に開業する計画で進められています。このため、リニアを見据えたまちづくりに取り組むにあたっては、時代潮流を踏まえ、リニア開業時やそれ以降の日本の社会構造、本市を取り巻く状況を的確に予測し、リニア時代に相応しいまちづくりを進めなければなりません。

(1) 本格的な少子高齢化と人口減少時代の到来

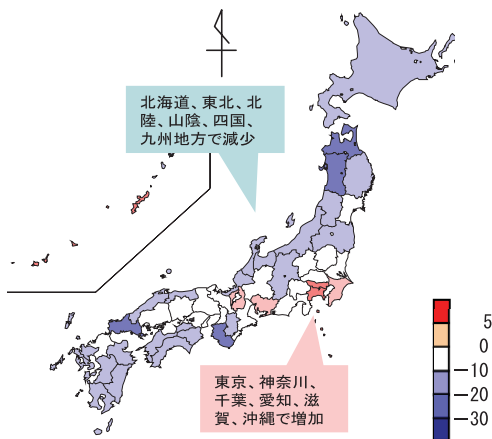
我が国の合計特殊出生率は、1950(昭和25)年頃から低下傾向にあり、1975(昭和50)年に2.0を下回り、2005(平成17)年には1.26と過去最低となりました。2011(平成23)年は1.39と、多少の回復はみられますが、少子化は進んでいます。

こうした影響により、日本の総人口は、2005(平成17)年の約1億2,800万人をピークに減少し、国立社会保障・人口問題研究所によると今後、急速に人口減少が進み、2047年には、1億人を割り込むと予測されています。人口減少は、特に地方部で急速に進み、若年層が大都市へ集中する傾向が一層強まることも予測されています。

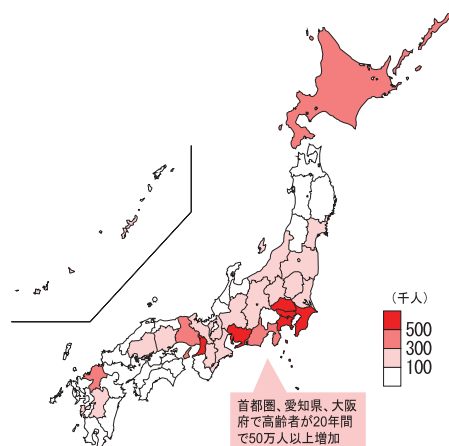
また、高齢化(65歳以上人口の総人口に占める割合)も進行し、2010(平成22)年の23.0%からリニア開業予定の2027年には30.7%に上昇することが予測されています。特に首都圏の高齢者は急激に増加し、2010(平成22)年の245万人から2030年には970万人になると推計されています。

本市においても少子高齢化、人口減少は顕著で、全国平均よりも早く進んでいます。

将来人口変化率(2005/2025)

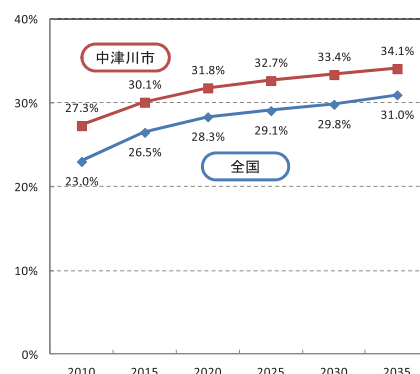
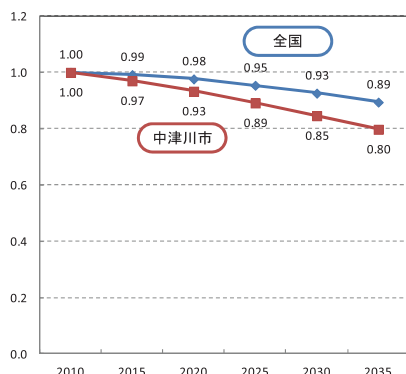


都道府県別65歳以上人口の見通し(2005~2025増加数)



出典: 国立社会保障人口問題研究所(2008年12月推計)

全国と中津川市の2010(平成22)年基準の人口推移(左)と高齢化率の推移(右)



出典: 将来人口推計(2012年1月推計) 中位推計(国立社会保障・人口問題研究所)

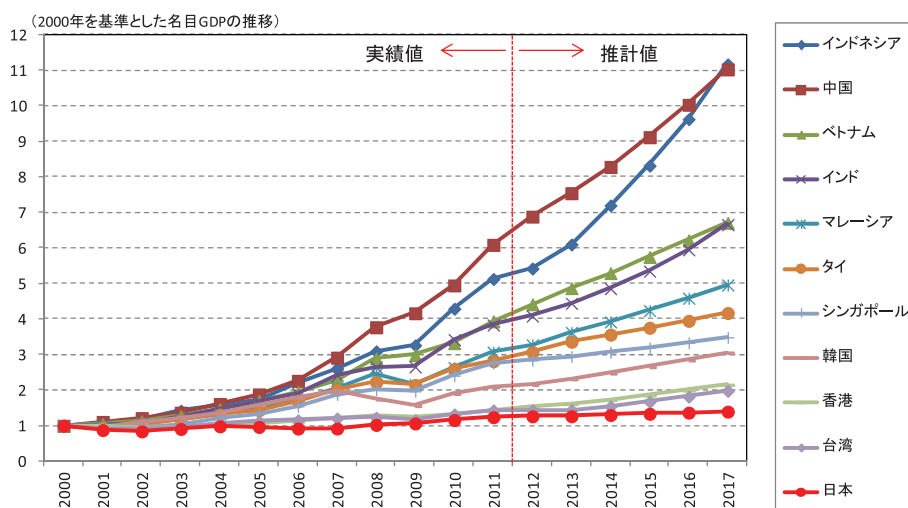
(2) 産業構造の変化とグローバル化の進展

近年、東アジアやBRICS(ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ)をはじめとした新興国の経済成長は著しく、これまで、日本や欧米諸国が中心となって牽引してきた世界経済の構造が大きく変化しています。我が国においても、国境を越えた企業活動が盛んに行われ、モノづくり産業が生産拠点を外国に移転するなどの現象が起きています。さらに、人口減少による国内消費の落ち込み、労働人口の減少により国内市場が縮小し、企業の海外進出の傾向が一層強まり、国内産業の空洞化がさらに進むことが懸念されます。

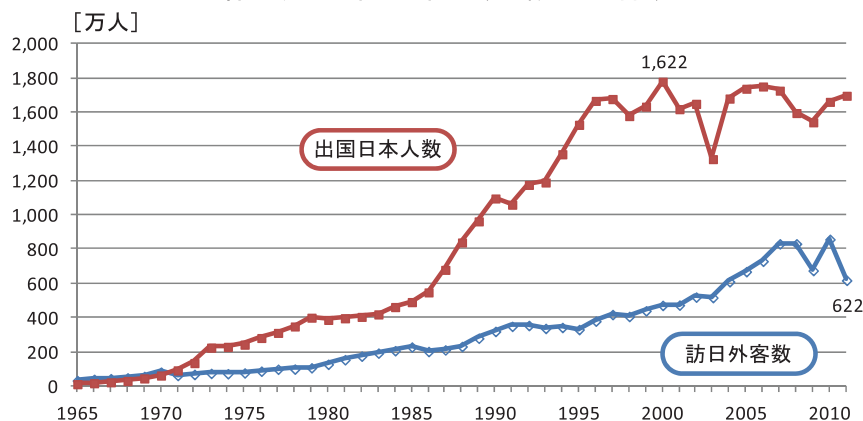
このため、国内においては、これまでの産業構造から転換し、新しい形をつくることが求められています。これまでの、高い技術力と優れた知的能力により良質な製品を製造してきましたが、今後は、その高い技術力と優れた知的能力そのものを商品として新興国に売り込んでいくことが有効と考えられます。

また、新興国の経済発展により新たな富裕層が誕生し、彼らによる国際観光市場の活性化もみられます。東日本大震災の影響による減少はあったものの、東アジアを中心とした訪日観光客数も増加傾向にあり、今後も増え続けると見込まれています。

日本とアジア諸国の GDP の推移



増加する出国日本人数と訪日外客数



出典:年別 訪日外客数、出国日本人数の推移(JNTO:日本政府観光局)

注)訪日外客数は、法務省資料に基づき、JNTO が外国人正規入国者のうちから日本に永続的に居住する外国人を除き、さらに一時上陸客等を加えて集計。

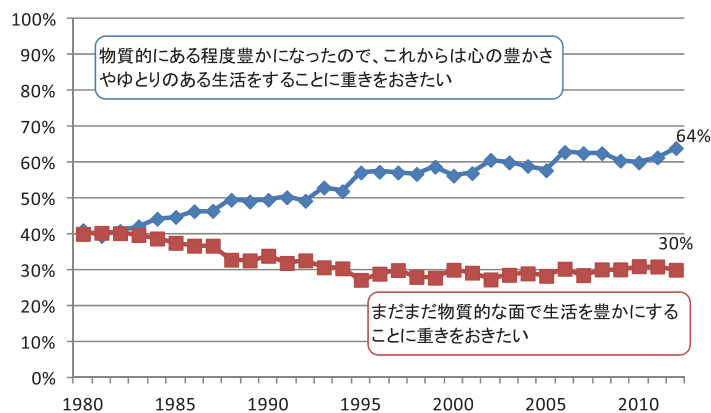


(3) 心の豊かさが重要視される時代

内閣府が実施した国民生活に関する世論調査によると、物の豊かさよりも心の豊かさを求める傾向が年々強くなってきています。平成19年版国民生活白書では、心の豊かさについて、人々の充実感や安心感が大きく関わっているとされ、家族と一緒に過ごす時間が長い人、隣近所と行き来する頻度が多い人、職場の人と行き来する頻度が多い人ほど、精神的な安らぎを得る傾向があると述べています。

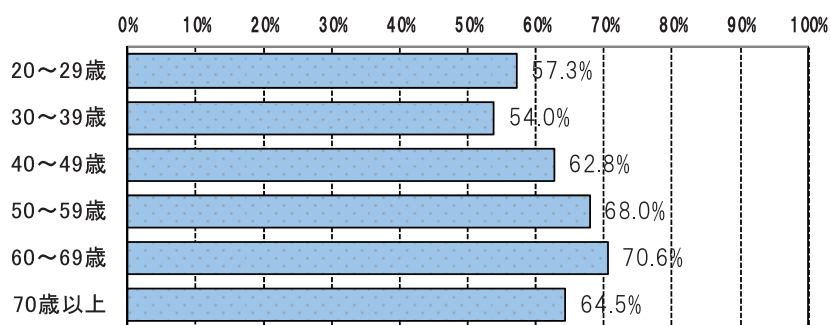
心の豊かさを求める割合は年齢が上がるほど増える傾向にあります。高齢化社会を迎え、退職して会社とのつながりがなくなる人が増加してくる社会においては、地域とのつながりを持つことが心の豊かさを得るうえでますます重要性を増してきます。

心の豊かさとの豊かさを求める傾向



出典: 国民生活に関する世論調査(2012年・内閣府)

年代別の「物質的にある程度豊になったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きを置きたい」と答えた割合



出典: 国民生活に関する世論調査(2012年・内閣府)

(4) 環境との共生を目指す時代

これまで、日本やアメリカをはじめとする先進国は、森林伐採などの自然破壊やエネルギーの大量消費など、地球環境を犠牲にして経済発展を遂げ、近年では、世界規模での人口増加、新興国の経済発展に伴うさらなるエネルギーの大量消費など、地球規模での環境問題が拡大しています。

世界の二酸化炭素排出量も新興国の経済発展などにより増加が予測され、地球温暖化などによる地球環境の悪化が懸念されています。

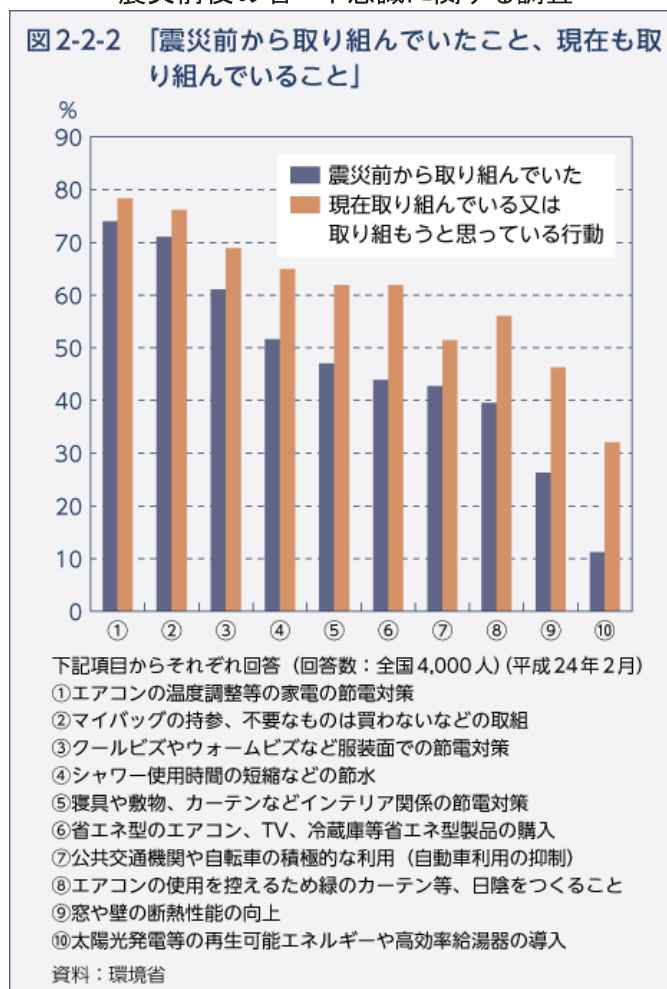
こうしたなか、2002(平成14)年にCO2排出量削減に向けた国際条約である京都議定書を批准するなど、世界規模で環境に対する配慮の方向性を打ち出し、持続可能な社会として環境への負荷が少ない循環型の社会づくりへの取り組みが始まっています。

我が国においても環境配慮への意識が高まり、さらに、東日本大震災による原子力発電のリスクが明らかとなり、省エネルギーへの意識も高まっています。

近年、ICT(Information and Communication Technology)*を活用し、各世帯のエネルギーの利用状況に応じて電力の配分をコントロールし、地域全体でエネルギーの効率利用を図るスマートシティ構想への取り組みも始まっています。

また、こうした自然環境に対する意識の高まりを受け、住民の意識も変化してきています。都市住民においても庭や田畑で土とふれあい草木や作物の成長を楽しみながら暮らすスローライフという暮らし方への関心が高まっており、緑豊かな田舎暮らしの良さが再認識されています。

震災前後の省エネ意識に関する調査



出典:平成24年版 環境・循環型社会・生物多様性白書(環境省)